

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23383

研究課題名（和文）高機能自閉スペクトラム症児の抑うつへの予防に向けたSSTに関する基礎研究

研究課題名（英文）Basic research on SST for prevention of depression in children and adolescents with high-functioning autism spectrum disorder

研究代表者

中西 陽（NAKANISHI, Yo）

奈良教育大学・学校教育講座・特任准教授

研究者番号：30846845

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では自閉スペクトラム症（ASD）児の不適應行動を測定する尺度を作成し、信頼性と妥当性を確認した。また、作成した尺度を用いて、一般の子どものASD特性の個人差がどのようなプロセスで抑うつ症状に関連するかを検討した。その結果、対人場面での適應行動の少なさと対人場面での消極的な行動や活動に無関心な態度を示す行動といった不適應行動の多さは子どもの主観的な友人関係の適應感を媒介して抑うつ症状を強める要因であることが明らかになった。以上の結果より、ASD児の抑うつへの予防には集団への参加に対する消極的な行動やその背景要因に焦点を置きながら友人関係の支援を検討していくことが重要であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、ASD児に特徴的な対人場面での不適應行動を測定する尺度が作成されたことにより、今後のASD児に対するソーシャルスキル支援において信頼性と妥当性のある効果測定を実施することが可能となった。このような臨床的意義に加えて、今後本尺度を利用することで、ASD児の不適應行動と様々な変数との関連を明らかにすることができるだろう。また、対人場面での不適應行動の改善に対する支援が友人関係の適應を高め、抑うつを予防するというモデルが実証されたことは、今後のASD児の抑うつに対する予防的支援の理論的基盤を提供したと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed a scale to measure maladaptive behavior in children and adolescents with autism spectrum disorder (ASD) and confirmed its reliability and validity. The scale consisted of 25 items with a three-factor structure of "passive/indifference", "self-centered rule", and "unnatural communication". In addition, using the scale, we investigated how individual differences in ASD traits of general children and adolescents are related to depressive symptoms. Structural equation modeling revealed that less adaptive behavior and more maladaptive behaviors such as passive behavior and indifference to activities in social situations also mediate relationships with friends and facilitated depression. The results suggested that it is important to examine support while focusing on passive behavior toward group participation and its background factors in order to prevent depression in children and adolescents with ASD.

研究分野：発達障害、臨床心理学

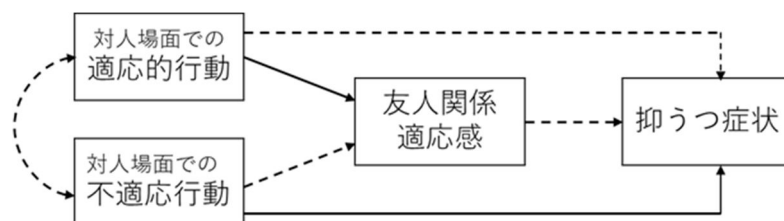
キーワード：自閉スペクトラム症 抑うつ 不適應行動 ソーシャルスキルトレーニング ソーシャルスキル

1. 研究開始当初の背景

知的発達に遅れのない自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) の子どもにおいては、二次的な問題として臨床レベルの抑うつ症状を引き起こしやすく (47.1%が該当: Bitsika & Sharpley, 2015) 予防的な支援の必要性が指摘される。先行研究においては、ASD 児の抑うつ症状に影響を及ぼす要因として、いじめの被害体験 (Pouw et al., 2015) や孤独感との関連が明らかにされており (Hedley et al., 2018) 友人や仲間との関係においてネガティブな体験を蓄積させないように支援していくことが抑うつ予防に重要であると考えられる。

ASD 児の仲間・友人関係の向上を目的とした支援法にソーシャルスキルトレーニング (Social Skills Training: SST) がある。SST は ASD 児に対する支援方法としてこれまでも国内外で幅広く実践されており、抑うつ症状など二次障害の予防効果が期待されている。しかしながら、ASD 児を対象とした SST においてターゲットとなるソーシャルスキルの変化と抑うつとの関連を明らかにした研究はないことからこれらの関連性を明らかにすることが求められる。

一方で、これらの関連性が検討されてこなかった背景には、ASD 児のソーシャルスキルを測定するのに妥当な (すなわち変化や個人差に対する検出力のある) 指標がないという問題があると考えられ、まずは ASD 児のソーシャルスキルの測定に特化した尺度の開発が課題となっている。ソーシャルスキルは対人場面での適応的な行動の多さと不適応的行動 (例「自分の関心事を一方的に話す」など) の少なさの 2 つの観点からとらえることができる。適応的な行動を測定する尺度については既に開発がなされ (中西・石川, 2018) 一般の子どもたちを対象にしたアナログ研究において、ASD 特性の強さから影響を受けた適応的行動の低さは、友人関係の適応感を媒介して抑うつ症状を強めるといったプロセスが明らかにされている (中西・石川, 2021)。しかしながら、不適応的行動については尺度が未整備の状態であることから、抑うつへのプロセスを検証できていない。したがって、新たに ASD 児の不適応的行動を測定する尺度を開発するとともに、図 1 に示すモデルについて検証を行うことで、ASD 児のソーシャルスキルと抑うつとの関連性を明らかにすることができる。



※実線は正、破線は負の関連

図 1 ソーシャルスキルから抑うつ症状への影響モデル

2. 研究の目的

上記の研究背景を踏まえて、本研究では下記の 2 点について検討することを目的とした。

- 目的(1) ASD 児の対人場面での不適応行動を測定する尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討すること
- 目的(2) ASD 児の対人場面での適応行動と不適応行動の 2 側面から抑うつへの影響モデルを検討すること (図 1 のモデルの検証)

3. 研究の方法

(1) 項目群の作成

はじめに、研究実施者を含む 2 名の臨床心理士が、ASD 児のための対人不適応行動尺度の項目群を作成し、発達障害の支援を専門とする別の臨床心理士 3 名に、本研究の目的に照らしたときに、各項目が示す内容はどの程度妥当であると考えられるかについて評価をしてもらい、項目群の内容的妥当性を検討した。

(2) 質問紙調査

対象：小学 4 年生から中学 3 年生までの子どもとその母親

調査内容：(ア) ~ (オ) の内容には母親が、(カ) には子どもがそれぞれ回答した。

(ア) 子どもの年齢、学年、性別、ASD の診断有無

(イ) ASD 児のための対人不適応行動尺度暫定項目群 (47 項目)

(ウ) ASD 児のための社会的スキル尺度親評定版 (中西・石川, 2018)

(エ) 対人応答性尺度日本語版 (Social Responsiveness Scale (SRS) (森脇他, 2011))

(オ) 日本語版 Autism Spectrum Questionnaire (ASSQ) 短縮版 (伊藤他, 2014)

(カ) 中高生用学校生活尺度の「友人との関係」下位尺度 (大久保・青柳, 2004)

(3) 調査実施手続き

本研究では参加者を調査会社への委託による方法と発達障害の専門相談機関の利用者への案内による方法で募集し、調査参加の同意を示した者に質問紙への回答を求めた。

(4) 分析方法

対人不適応行動尺度の作成にあたり、はじめに 47 項目について項目反応理論に基づいて識別力と困難度を推定し、困難度が標準域を超えて高かった 5 項目を除いて、42 項目で探索的因子分析を行った。続いて、内的整合性の確認、構成概念妥当性の検討のため(ウ)(エ)(カ)の尺度との相関係数の算出、ASD 児と定型発達児の尺度得点の比較を行った。さらに、構造方程式モデリングにより仮説モデルが実証されるかどうか検証した。

4. 研究成果

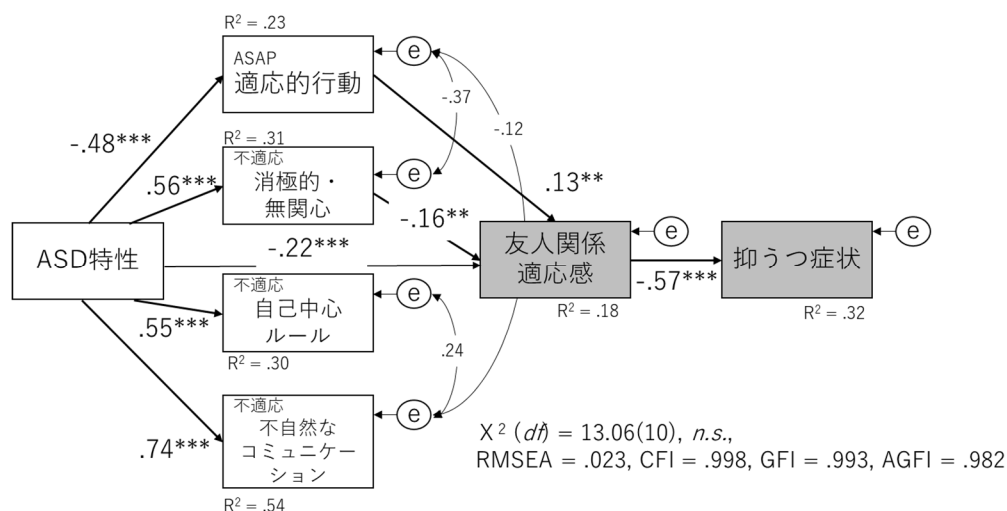
有効回答を示した ASD 児 40 名と定型発達 516 名を対象に分析を行った。

(1) ASD 児のための対人不適応行動尺度の信頼性と妥当性の検討

探索的因子分析により、対人不適応行動尺度は 25 項目 3 因子が妥当であると考えられる結果を示した。各因子は内容を検討し、「消極的・無関心」「自己中心ルール」「不自然なコミュニケーション」と命名した。各因子の係数から十分な内的整合性が確認された。また、構成概念妥当性を検討するため、(ウ) ASAP、(エ) SRS、(オ) ASSQ、(カ) 友人関係尺度との相関係数を算出したところ、有意に弱い～中程度の値を示した。加えて、ASD 群(40 名)と定型発達群(ASD 児と年齢・性別が一致するサンプルを無作為に 40 名選定)の得点を比較した結果、3 因子とも ASD 群の方が定型発達群より得点が有意に高かったことから、本研究で作成した ASD 児のための対人不適応行動尺度は十分な構成概念妥当性を有していると考えられた。

(2) 対人場面での適応的行動と不適応的行動の抑うつへの影響モデルの検討

当初の計画では、ASD 児のデータを 100 名程度収集し、図 1 のモデル検討を行うことを考えていたが、新型コロナウイルス感染拡大等の影響により、ASD 児のデータ収集に限界があったため、計画を修正し、本研究では定型発達児を含めたアナログ分析によりモデルの検証を行った。その結果、図 2 の通り、一般の子どもたちにみられる ASD 特性の強さは、適応的行動の低さと不適応行動の「消極的・無関心」の高さに影響を及ぼし、さらに友人関係の適応感を介して抑うつ症状を強めていることが示された。



【まとめ】

以上の結果より、本研究では ASD 児のための不適応行動尺度を作成し、信頼性と妥当性を確認したところ、いずれも十分であると考えられる結果が得られた。今後 ASD 児のデータ収集を追加で実施し、再度検討するという課題はあるものの、本尺度は発達障害臨床におけるアセスメントでの利用や様々な変数との関連を明らかにする観察研究での活用が期待される。

さらに、本研究では子どもたちに示される ASD 特性の個人差がどのようなプロセスで抑うつ症状に関連するかを ASD の子どもたちを含めた一般の子どもたちのデータに基づくアナログ研究により検討した。その結果、対人場面での適応行動の少なさに加えて、対人場面での消極的な行動や活動に無関心な行動の多さもまた主観的な友人関係の適応感を介して抑うつ症状を強める要因であることが明らかになった。他方、ASD 児に見られることのある、自分のルールを他者

にも求めるといった行動やコミュニケーション時のぎこちなさなどは、主観的な友人関係や抑うつとは関連が示されなかったことから、ASD 児の抑うつ予防には集団への参加に対しての不安に伴うような消極的な行動に焦点を置きながら支援を検討していくことが重要であることが示された。

<引用文献>

1. Bitsika, V., & Sharpley, C. F. (2015). Differences in the prevalence, severity and symptom profiles of depression in boys and adolescents with an autism spectrum disorder versus normally developing controls. *International Journal of Disability, Development and Education*, 62, 158-167.
2. Pouw, L., BC., Rieffe, C., Stockmann, L., & Gadow, K. D. (2015). The link between emotion regulation, social functioning, and depression in boys with ASD. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 7, 549-556.
3. Hedley, D., Uljarević, M., Wilmot, M., Richdale, A., & Dissanayake, C. (2018). Understanding depression and thoughts of self-harm in autism: A potential mechanism involving loneliness. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 46, 1-7.
4. 中西・石川(2018)自閉スペクトラム症児のための社会的スキル尺度親評定版の作成, 心理臨床学研究, 36, 387-396.
5. 中西・石川(2021)小中学生の自閉症的特性が抑うつ症状に及ぼす影響 ソーシャルスキルと友人関係の媒介効果の検討 認知行動療法研究, 47, 11-21.
6. 森脇愛子・小山智典・神尾陽子(2011)一般児童における発達障害の有病率と関連要因に関する研究 対人応答性尺度(Social Responsiveness Scale: SRS)の標準化 1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化 - 地域ベースの横断的および縦断的研究 平成22年度総括・分担研究報告書(pp. 49-66)国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
7. 伊藤大幸・松本かおり・高柳伸哉・原田新・大嶽さと子・望月直人, ... & 辻井正次. (2014). ASSQ 日本語版の心理測定学的特性の検証と短縮版の開発. 心理学研究, 85, 304-312.
8. 大久保智生・青柳 肇(2004). 中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本福祉教育専門学校紀要, 12, 9-15.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中西 陽・石川 信一	4. 巻 47
2. 論文標題 小中学生の自閉症の特性が抑うつ症状に及ぼす影響 ソーシャルスキルと友人関係の媒介効果の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知行動療法研究	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24468/jjbct.19-016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中西 陽・石川 信一・青山 三智子・杉若 弘子	4. 巻 29
2. 論文標題 自閉スペクトラム症児のための社会的スキル尺度親評定版の信頼性と妥当性の再検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 LD研究	6. 最初と最後の頁 85-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32198/jald.29.1_85	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------